



彗星の科学 知る・撮る・探る

鈴木文二・秋澤宏樹・菅原 賢 著

恒星社厚生閣 2,600円+税 152頁

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

昨年11月に大彗星として世を騒がせたアイソン彗星の話題は、まだ読者の皆さんの記憶に新しいだろう。残念ながら近日点通過後に崩壊して見えなくなってしまったが、多くの人々が天文学への関心を強くする貴重な機会になったのではないだろうか。なかにはこれをきっかけに研究の道を志す子どもたちもいるかもしれない。彗星がもつ魅力の大きさを改めて感じさせる出来事だった。

しかし、「彗星とは何か？」という問いにきちんと答えられる人は、たとえ天文研究者でもそれほど多くないのではないだろうか。ましてやそれらを研究して何がわかるのか、ということが広く理解されているとは言い難い。本書は彗星を調べる意義とその方法を初心者にもわかりやすく解説した「彗星の教科書」である。「天文学入門」、「彗星を知る」、「彗星を撮る」、「彗星を探る」という四つの章で構成されており、1章では天文学全般の概説をざっと紹介し、2章では彗星およびそれらに関係する天体についてこれまでの研究から得られている知見が簡潔にまとめられている。特に2章はある程度専門的な内容に踏み込みつつも、過去のエピソードや身近なたとえを交えるなど工夫が凝らされており、読み応えのある内容になっている。

3章と4章は、彗星の観測と測定の方法が詳細に解説されている。ここで一つ気になるのは、本書にはどのような読者をターゲットにしているのかが明記されていないことである。確かに、1章と2章は幅広い読者層に対応している。しかし、

3章からは明らかにアマチュア天文家を念頭に置いた説明が目立つ。例えば彗星観測の紹介として、眼視に始まり、コンパクトデジタルカメラや一眼レフカメラを用いた撮影方法を詳しく解説する一方で、冷却CCDカメラについてはコラム内で触れられているのみだ。基本的に個人レベルで調達できる機器を使った観測の話に終始している。多くの人に読んでもらいたいとの思いから読者を限定するような記述は避けたのかもしれないが、彗星は市販のデジカメで撮影するもの、というやや偏った印象を読者に与えかねないように感じた。

測定方法の章では最新の研究成果についての話題も絡めてあり、彗星の研究を志す人だけでなく、2章の内容よりもさらに深いことが知りたい人向けの読み物としても適している。特に彗星の尾の種類や性質が詳しく説明されており、これを読めば、本書の最初に掲載されているような彗星の画像をさまざまな視点から楽しむことができるのではないだろうか。一つ付け加えるなら、今後の彗星研究にどのような展望が期待できるかという記述がほしかった。

全体としては初歩から専門的な内容までをわかりやすく網羅した良書である。特にこれから彗星の研究を始めたいという人には手放せない入門書になりうるだろう。本書を通して多くの人々に彗星を調べることの面白さが伝わることを願いたい。

寺居 剛 (国立天文台)